Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ
Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database
https://twinkle.repo.nii.ac.jp

# 15歳以下の孤立性僧帽弁疾患における僧帽弁手術の遠隔期成績



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2019-02-08<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 久米, 悠太<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.20780/00032085 |

# 主 論 文 の 要 旨

15 歳以下の孤立性僧帽弁疾患における僧帽弁手術の遠隔期成績

東京女子医科大学心臓血管外科学教室
（指導：山崎健二教授）
久米　悠太

日本心臓血管外科学会雑誌　第 45 巻　第 4 号　154 頁～160 頁（平成 28 年 7 月 15 日発行）に掲載

【要　旨】

小児期には可及的に弁形成術を行うことが望ましいが、やむを得ず弁置換術となる症例が存在する。15 歳以下の孤立性僧帽弁疾患に対する僧帽弁形成術、機械弁置換術の遠隔成績を検討した。1981 年 1 月から 2010 年 12 月までに当院で僧帽弁形成術を行った 30 例(P 群及び機械弁による僧帽弁置換術を行った 26 例(R 群)を対象とした。P 群、R 群共に周術期死亡例はなく遠隔期に R 群で 4 例を失い、再手術は P 群で 6 例（うち残存逆流 5 例)、R 群で 5 例（うちサイズアップ 3 例）に認めた。脳関連合併症は両群とも遠隔期に 1 例ずつ認めたのみで、人工弁感染は認めなかった。10 年時での生存率は P 群 100.0%、R 群 88.0%であり有意差が見られた。10 年時での再手術回避率は P 群 77.6%、R 群 77.0%、10 年時における脳関連合併症回避率は共に 100%であり有意差は見られなかった。当科における僧帽弁形成術の成績は、術後早期に僧帽弁置換を余儀なくされる症例が存在するものの、その高い生存率と低い脳関連合併症率から、遠隔成績はおおむね良好であると言える。また、遠隔期の再手術回避率には懸念が残るものの若年期における僧帽弁置換術の成績としては、懸念されていた機械弁による脳関連合併症の発生も少なく許容されるものと考えられた。孤立性僧帽弁閉鎖不全症に対する僧帽弁形成術、僧帽弁置換術の遠隔成績は良好であると言える。